

おうじん てんわう
應神天皇、

ちうあいてい だい し
仲哀帝の第四子なり。

は じ じんぐうくわうじう
母は神功皇后、

ちうあいてい
仲哀帝の九年

かのとみ もつ
十二月十四日辛亥を以て、

つくし かた うま
筑紫の蚊田に生る。

えう そうたつ
幼にして聰達、

げん かんしん ぶん
玄鑒深遠にして、

どうようしん し せいへうい
動容進止、聖表異あり。

はじ てんわう
初め天皇、

よう
孕にありしとき、

くわじう しみ をし ほう
皇后、神の教えを奉じ、

さんかん せい
三韓を征す。

てんわう うま およ
天皇、生るゝに及び、

わんじやうにく おこ ほむた ごと
腕上肉起りて靱の如く、

くわじう ゆうさう
皇后の雄装して

お じん じ
負へる所のものに似たり。

よつ ほむた なづ またたいちうてんわうしやう
因て譽田と名け、亦胎中天皇と稱す。

かのとみ とし
辛巳の歳、二月、

くわうこう てんわう ほう ひやくれう ひき
皇后、天皇を奉じ百寮を率ゐ、
とよらのみや いた

豊浦宮に至りて、

ちうあいてい も はつ
仲哀帝の喪を發し、

まさ しきう ほう みやこ かへ
將に梓宮を奉じて京に還らんとす。

とき てんわう しょけいかさかのみこ
時に、天皇の庶兄廢坂王・

おしくまのみこ へい あ
忍熊王、兵を擧げて、

わうじ はりま えう
皇子を播磨に要す。

たまたまかさか し おしくまのみこ
會廢坂死し、忍熊王、

しりぞ すみのえ たむろ
退きて住吉に屯す。

くわうこう すなは たけしうちすくね
皇后、即ち武内宿禰をして

てんわう ほう
天皇を奉じ、

てん なんかい きい
轉じて南海より紀伊の

みなと いた くわうこう
水門に至らしめ、皇后は、

たゞち なには むか
直に難波に向ひしに、

ふね くわいせん すん
船、回旋して進まず。

む このみなと かへ
務古水門に還りて、
これ うらな
之を卜ふ。

たまたまかみ をしへ え
適神の誨を得て、

しよじん やしろ た
諸神の祠を立て、

これ まつ
焉を祭りしかば、

ふねつゐ すゝ
船遂に進むことを得たり。

おしくま またしりぞ うぢ ぐん
忍熊、又退きて菟路に軍す。

くわうこう
皇后、

すなは てんわう きい ひたか ぐわい
乃ち天皇と紀伊の日高に會し、

しぬのみや い
小竹宮に入る。

ひるくら よる こと れん
晝晦くして夜の如きこと連日。

かのえね
三月五日庚子、

くわうこう たけしうちのみすくね
皇后、武内宿禰・

なにはね こ たけふさくま
難波根子・武振熊をして

おしくま う
忍熊を撃たしむ。

おしくま やぶ し
忍熊、敗れて死す。

十月二日甲子、きのえね

群臣、皇后を尊びてぐんしん くわうこう たつと

皇太后をと曰ふ。い

朝に臨みて政を撰す。てう のぞ まつりごと せつ

大臣武内宿禰、故の如し。おほおみ たけしうちのみくね もとごと

壬午の歳、十一月八日甲午、みずのえうま とし きのえねうま

仲哀天皇を葬る。ちうあいてんわう ほうむ

癸未の歳、正月三日戊子、みづのとひつじ とし しゃう つちのえね

皇太后、

天皇を立て、皇太子となし、てんわう た くわうたいし

磐余に都す。いはれ みやこ

乙酉の歳、三月七日己酉、きのとり とし じちのやうじ

新羅、使を遣はして朝貢す。しらぎ つかひ つか てうこう

微叱許智、國に歸らんことをみしこち くに かへ

請ひければ、之を許し、こ これ ゆる

葛城襲津彦をしてかぢらきのそ つひこ

之を送らしむ。これ おく

みづのとみ とし

癸巳の歳、二月八日甲子、

きのえね

たけしうちすすくね

武内宿禰、

くわうたいし

ほう

つぬが ゆ

皇太子を奉じて角鹿に如き、

け ひのおほかみ はい

筭飯大神を拝し、十七日癸酉、

みづのととり

つぬが

いた

角鹿より至る。

くわうたいこう

えん

たいでん

まう

皇太后、宴を大殿に設け、

さかづき

あ

うた

つく

觴を擧げ歌を作りて

くわうたいし

じゆ

な

皇太子の壽を爲す。

たけしうちすすくね

武内宿禰、

くわうたいし

かは

たふか

皇太子に代りて答歌す。

ひのえとら

とし

丙寅の歳。

きのと

ついたち

三月乙亥の朔、

しまのすすくね

とくしゆのくに

つか

斯摩宿禰を卓淳國に遣はす。

しまのすすくね

斯摩宿禰、

つひ

くだら

すゐぶ

かへ

遂に百濟を綏撫して還る。

たせう

とし

丁卯の歳、四月、

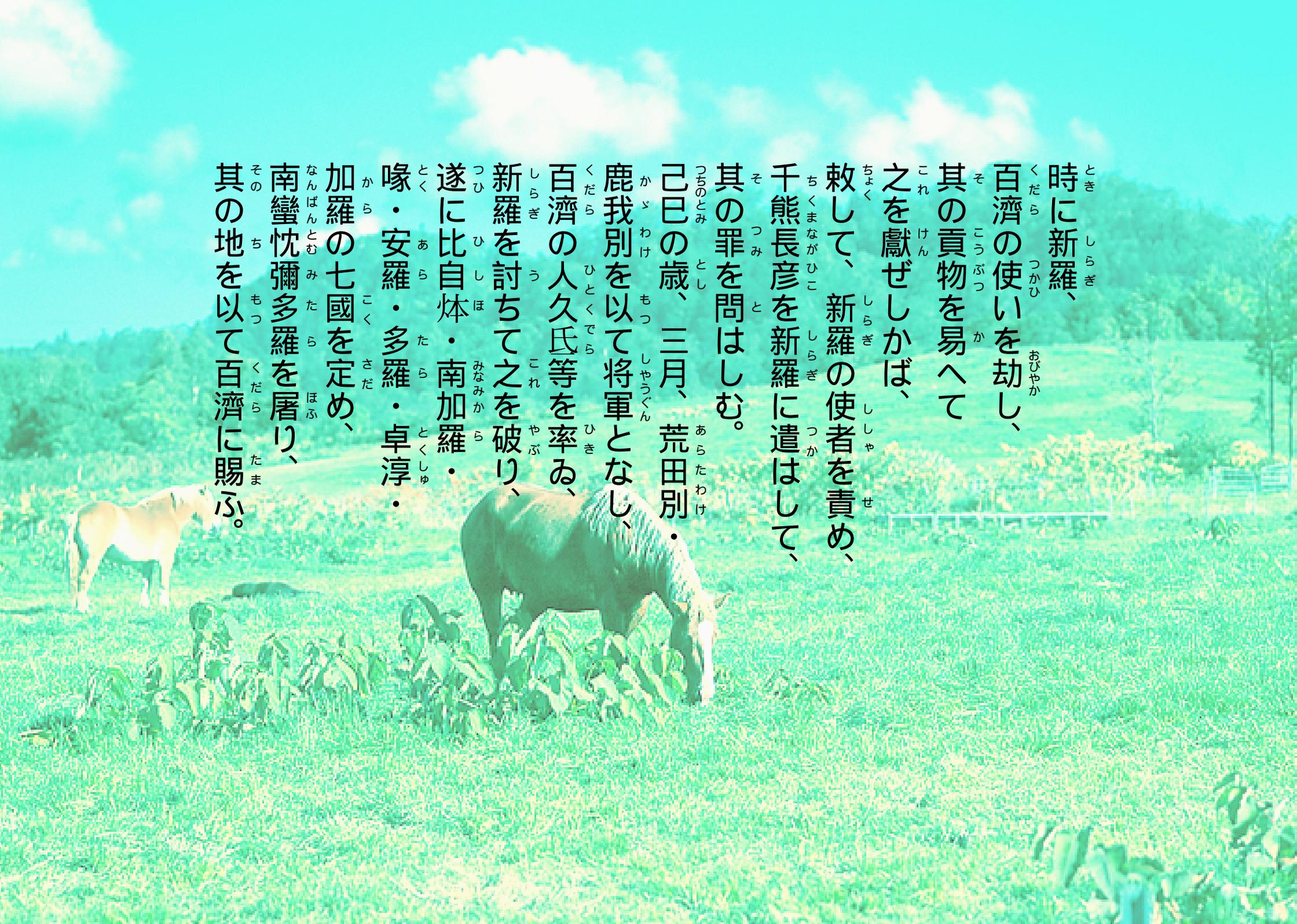
くだら

しちぎ

てうしう

百濟、新羅とともに朝貢す。

とき しらぎ
時に新羅、
くだら つかひ おびやか
百濟の使いを劫し、
そ こうぶつ か
其の貢物を易へて
これ けん
之を獻ぜしかば、
ちよく
敕して、新羅の使者を責め、
ちくまながひこ しらぎ つか
千熊長彦を新羅に遣はして、
そ つみ と
其の罪を問はしむ。
つちのとみ とし
己巳の歳、三月、荒田別・
かゞわけ もつ しゃうぐん
鹿我別を以て將軍となし、
くだら ひとくでら ひき
百濟の人久氏等を率ゐ、
しらぎ う これ やぶ
新羅を討ちて之を破り、
つひ ひしほ みなみから
遂に比自牒・南加羅・
とく あら たら とくしゆ
喙・安羅・多羅・卓淳・
から かく さだ
加羅の七國を定め、
なんばんとむ みたら ほふ
南蠻枕彌多羅を屠り、
その ち もつ くだら たま
其の地を以て百濟に賜ふ。



かのえうま とし
庚午の歳、

あらたわけら かへ
二月、荒田別等還る。

ちくまながひこおよ くで
五月、千熊長彦及び久氏、

くだら いた
百濟より至る。

ふたゝ たさのさし
再び多沙城を

くだら ま たま
百濟に増し賜ふ。

かのとひつじとし
辛未の歳、三月、

くだら またくで つか てうこう
百濟、又久氏を遣はして朝貢す。

みづのえさるとし
壬申の歳、

ひのえね
九月十日丙子、

くだら つかひくで
百濟の使久氏、

ちくまながひこ したが きた
千熊長彦に従ひて来り、

なゝさやのたちなゝつこのかゞみおのおの
七枝刀・七子鏡各一、

およ ぢうはうすうしゆ こう
及び重寶數種を貢す。

きのとゐ とし くだらわうせうこしゆつ
乙亥の歳、百濟王肖古卒す。

ひのえね とし くだらわうきすた
丙子の歳、百濟王貴須立つ。

みづのえつま とし
壬午の歳、

しらぎ てう
新羅、朝せず。

かつらき そ つひこ

葛城襲津彦をして

これ う

之を討たしむ。

きのえさる とし

甲申の歳、

くだらわう き すしゆつ

百済王貴須卒し、

ことむる た

子枕流立。

きのとこり とし

乙酉の歳、

くだらわう とむる しゆつ

百済王枕流卒して、

こ あくわとしわか

子阿花年少ければ、

を ぢしんし さんりふ

叔父辰斯篡立す。

じゆのてう とし

己丑の歳、

ひのとうし

四月十七日丁丑、

くわうたいこう ほう

皇太后崩ず。

みづのえさる

十月十五日壬申、

じんべうくわうじゆう

神功皇后を葬る。

ぐわんねんかのえとら

はるしやうがつひのとる

ついたち

元年庚寅、春正月丁亥の朔、

てんわう くわいみ つ

天皇、位に即く。

とき とし

時に年七十一。

これ ほむたのすめらみこと

是を饗田天皇となす。

かるしま みやこ

輕島に都す。

これ あかりのみや い

是を明宮と謂ふ。

かのとう

はる

みづのえね

二年辛卯、春三月壬子、

なかつひめ た くわうこう

仲姫を立てて皇后となす。

みづのえたつ

みづのえね

三年壬辰、冬十月三日癸酉、

あづま えみしてうこう

東の蝦夷朝貢す。

すなは えみし

即ち蝦夷をして

むまさかのみち つく

厩坂道を作らしむ。

しよゐい あま

十一月、所在の海人、

ゆうどう

くわうめい

したが

擾動して皇命に従はず。

おほはまのすくね つか

大濱宿禰を遣はして

あま つかさ

海人の宰となし、

これ あんしふ

之を安輯せしむ。

この歳、百済王辰斯、

無禮なるを以て、

紀角宿禰・羽田矢代宿禰・

蘇我石川宿禰・平群木菟宿禰・

を百済に遣はして、

之を責めしむ。

國人、辰斯を殺して以て謝せり。

角等、阿花を立て、歸る。

五年甲午、

秋八月十三日壬寅、

諸國に令して、

海人及び山守部を定む。

冬十月、伊豆に令して、

船を作らしむ。

長さ十丈、之を海に試みるに、

輕疾にして馳するが如し。

名けて枯野と曰ふ。

六年乙未、春二月、近江に行幸す。

七年丙申、高麗・百濟・任那・新羅、
並に來朝す。

武内宿禰をして、諸韓人を領して、

池を作らしむ。

因て韓人池と號す。

八年丁酉、春三月、百濟王阿花、

無禮なるを以て、枕彌多禮及び

峴南・支侵・谷那・

東韓の地を削る。

阿花懼れて、

其の子直支をして、

來朝して罪を謝せしむ。

九年戊戌、夏四月、

武内宿禰をして、筑紫を監察せしむ。

十一年庚子、冬十月、劔池・

輕池・鹿垣池・厩坂池を作る。

みずのとつ

十四年癸卯、春二月、

百濟、縫衣女を貢す。

是の歳、弓月君、歸化を請ふ。

葛城襲津彦を加羅に遣はして、

之を迎へしむ。

きのえたつ

十五年甲辰、

ひのとつ

秋八月六日丁卯、

百濟王阿花、阿直岐をして

良馬二匹を貢せしむ。

荒田別・巫別を百濟に遣はして、

王仁を徴さしむ。

きのとみ

十六年乙巳、

くだらわう

春二月、百濟王、

わに

王仁をして、

治工卓素・呉服西素・

醸酒仁番等を率ゐて來朝せしめ、

論語十卷・千字文一卷を獻す。

くわん せんじもん くだらわう けん

るんご くだらわう せんじもん くだらわう けん



是の歳、百濟王阿花卒せしかば、
直支に勅して、
國に還りて位を嗣がしめ、
削る所の東韓の地を賜ひぬ。

秋八月、詔して、
平群木菟宿禰・

的戸田宿禰をして、
兵を率ゐて新羅を討たしむ。

遂に襲津彦及び
弓月の人口を將ゐて歸る。

十九年戊申、
冬十月戊戌の朔、
吉野宮に行幸す。

國樞の人、
醴酒を獻じて、
歌を奏す。

是より後、
屢貢獻す。

じつねんご

二十年己酉、秋九月、

かんしゅりうくわう えいあちのおみ

漢主劉宏の裔阿知使主、

および其の子都加使主、

十七縣の人口を率ゐて來り歸す。

けん じんこう ひき きた き

かのとみ

二十二年辛亥、春三月五日戊子、

なには おほすみのみや ぎやうかう

難波の大隈宮に行幸す。

夏四月、妃、兄媛、

きび きねい えひめ

吉備に歸寧す。

ひのえねいぬ

秋九月六日丙戌、

あはぢしま かり

淡路島に狩し、

きび じゅんせい

吉備を巡省して、

あづきしま ぎやうかう

小豆島に行幸し、

かのえとら

十日庚寅、葉田葦守宮に至る。

えひめ あにみともわけ しょく けん

兄媛の兄御友別、食を獻ず。

そ してい きび しょけん ほう

其の子弟を吉備の諸縣に封ず。

きのえとら くだらわうち ししゅつ

二十五年甲寅、百濟王直支卒して、

こく にした

子、久爾辛立つ。

二十八年丁巳、ひのとみ 秋九月、

高麗王、こまわう

使を遣はして朝貢す。つかひ つか てうこう

表文無禮なり。へうぶんぶれい

使者を詰責して、ししや きつせき

其の表を壊る。そ へう やぶ

三十一年庚申、かのえさる 秋八月、

詔して曰く、みことのり いは

官船枯野は、くわんせんからぬ

伊豆の國の貢する所なれども、いづ くに こう ところ

朽ちて用に堪へず。く よう た

然れども、しか

久しく官用を爲したれば、ひさ くわんよう な

其の功忘る可からず。そ こうわす べ

何にすれば以ていか もつ

其の名泯びずしてそ なほる

後世に傳ふることを得んと。こうせい つた え

ぐんけい みことのり ほう
群卿、詔を奉じ、

いっし ふね こぼ
有司をして船を毀ちて

たぎょ な
薪と為さしめ、

もつ しほ かこ に
以て鹽五百籠を煮て、

しょこく わか たま
諸國に頒ち賜ひ、

よつ めい ふね つく
因て命じて船を作らしむ。

しょこく ふね そう けん
諸國、船五百艘を獻じて、

むこ みなと あつま
武庫水門に湊る。

たまたましらぎ てうし
會新羅の調使、

むこ とま
武庫に泊りしが、

ひ しつ あつま ところ ふね
火を失して、湊る所の船を

えんせう
延焼せしかば、

そ つかひ じやうせき
其の使いを讓責す。

しらぎ わうおそ じょうじょう こう
新羅王懼れて良匠を貢す。

ひのえとら うちのえうま ついたち
三十七年丙寅、春二月戊午の朔、

あちのおみ つかのおみ くれ つか
阿知使主・都加使主を呉に遣はして、

きぬめひめ もと
縫工女を求めしむ。

三十九年戊辰、
つちのえ たつ
くだらわうちし

百濟王直支、

そ 其の妹、
ごもつて

新齋都媛をして
し せ つ ひ め

入りて侍せしむ。
い

四十年己巳、
じ ち の へ

正月二十四日甲子、
き の え ね
う ぢ の わ き い ら つ こ

菟道稚郎子を立て、
た
くわつたいし

皇太子となし、
お ほ さ ゃ き の み こ

大鷦鷯皇子をして
こ れ た す

之を輔けしめ、
お ほ や ま も り の み こ

大山守皇子をして
さん せん りん や

山川林野を掌らしむ。
つかさど

四十一年庚午、
かのえうま

春二月十五日戊申、
つちのえさる
てんわう

天皇、明宮に崩ず。
あかりのみや ほう

年一百十一。

是この月、

あちのおみら

阿知使主等、

こうぢよえひめ

工女兄媛・

おとひめ くれはとり

弟媛・呉織・

あやはとり ひき

穴織を率ゐて、

くれ いた

呉より至り、

かふち ゑ

河内の惠我藻伏山岡陵に葬る。

つみし おうじんてんわう

追諡して應神天皇と曰ふ。

げんみやうてい わどう

元明帝の和銅五年、

てんわう ぶぜんう さのこほり

天皇を豊前宇佐郡に祀り、

がう やはたのおほかみのみや まつ

號して八幡大神宮と曰ふ。

せいわてい

清和帝、

やましる せごやま いはしみづ

山城の男山の石清水に

やしる はじ

社を創め、

さいじ ほうさい

歳時に奉祭せり。